

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
The Japan Branch of the Dickens Fellowship

2020 年度秋季総会 -ディケンズ没後 150 年記念大会- プログラム

Annual General Meeting 2020 - A Video Conference to Commemorate the
150th Anniversary of Dickens's Death - Programme

日時：2020 年 10 月 3 日（土）

Date: 3 October 2020

開催形式：オンライン（Zoom で開催。詳細は別紙説明書をご参照ください）

Platform: Zoom

10:30-11:00 **理事会** Board of Trustees Meeting

10:30- **Zoom 会場 オープン** (入室は 10:30 以降にお願いします)

11:00-11:05 **開会の辞** Welcome Address
新野緑（ディケンズ・フェロウシップ日本支部長） Midori Niino
(President, The Japan Branch of the Dickens Fellowship)

11:05-11:30 **総会** General Meeting

11:30- **第 1 部 研究発表** Short Paper Session

11:30-12:15 **研究発表 1** Short Paper Session 1

司会：渡部智也（福岡大学）Tomoya Watanabe (Fukuoka University)

発表：杉田貴瑞（早稲田大学）Tamayoshi Sugita (Waseda University)

「『リトル・ドリット』におけるアーサーの内向性について」

“Introversive Arthur in *Little Dorrit*”

12:15-13:15 昼休み Lunch Break

13:15-14:00 **研究発表 2 Short Paper Session 2**

司会：田中孝信（大阪市立大学）Takanobu Tanaka (Osaka City University)

発表：吉田朱美（近畿大学）Akemi Yoshida (Kindai University)

「*A Tale of Two Cities*, アンデルセン「人魚姫」, ポー “William Wilson” に
おけるドッペルゲンガーのテーマ」

“*Doppelgängers and Doubles in Dickens’s A Tale of Two Cities, Andersen’s
‘The Little Mermaid,’ and Poe’s ‘William Wilson’*”

14:00-14:45 **研究発表 3 Short Paper Session 3**

司会：田中孝信（大阪市立大学）Takanobu Tanaka (Osaka City University)

発表：溝口薫（神戸女学院大学）Kaoru Mizoguchi (Kobe College)

「『ドクター・マリーゴールドの処方箋』—ディケンズにおける感情
と倫理」

“‘Doctor Marigold’s Prescriptions’—Dickens, Affect and Ethics”

15:00-17:30 **シンポジウム 「今に生きるディケンズ」**

Symposium: “Dickens’s Presence Today”

司会・講師：佐々木徹（京都大学）Toru Sasaki (Kyoto University)

講師：阿部公彦（東京大学）Masahiko Abe (University of Tokyo)

板倉巖一郎（関西大学）Gen’ichiro Itakura (Kansai University)

猪熊恵子（東京医科歯科大学） Keiko Inokuma (Tokyo Medical and
Dental University)

17:30 **閉会の辞 Closing Address**

松本靖彦（ディケンズ・フェロウシップ日本支部副支部長） Yasuhiko
Matsumoto (Vice President, The Japan Branch of the Dickens Fellowship)

研究発表・シンポジウム梗概

第1部 研究発表 Short Paper Session

研究発表1 Short Paper Session 1

「『リトル・ドリット』におけるアーサーの内向性について」

“Introversive Arthur in *Little Dorrit*”

杉田 貴瑞

『リトル・ドリット』の主人公アーサー・クレナムは、内向的な人物として作品に描かれる。その最たる特徴として「ノーボディ」なる人格を生み出す点が挙げられるが、それ以外の箇所でもアーサーは自らの意識のなかで自問自答を繰り返しており、このような内的思考の披瀝が「内向的なアーサー」という人物像を作り上げる最大の原因である。しかしながら、アーサーの思考の過程をたどるとペット・ミーグルズへの恋心などに見られるように、内的思考というよりも雑駁な空想とでも呼ぶべき混沌とした様相を呈している。そのような空想について検討しながら、なぜアーサーの思考が雑駁な印象を与えるかを探究するとともに、アーサーの本質ともされる自己否定の問題についても考察したい。

研究発表2 Short Paper Session 2

「*A Tale of Two Cities*, アンデルセン「人魚姫」, ポー “William Wilson”におけるドッペルゲンガーのテーマ」

“*Doppelgängers and Doubles in Dickens’s A Tale of Two Cities, Andersen’s ‘The Little Mermaid,’ and Poe’s ‘William Wilson’*”

吉田朱美

アンデルセンの「人魚姫」と *A Tale of Two Cities* を比較した研究は未だ行われていないようである。本発表では、*A Tale of Two Cities* の主要登場人物である Sydney Carton, Lucie Manette, および Charles Darnay をめぐる人間関係が、「人魚姫」の主人公である人魚、彼女に恋される人間の王子、およびその結婚相手となる人間の王女という三者間の関係とほぼ重なることを指摘し、ディケンズが *A Tale of Two Cities* を執筆する際、「人魚姫」の物語構造を下敷きとしていたのではないかとの仮説を提示したい。Sydney も人魚の姫も共に、その命懸けの献身ぶりが人に知られることはない。自分そっくりの顔をし、自分がそうであったかもしれないような立場にある他人と自分の愛する者とが幸福に結ばれるのを見届けたのち、愛する者のために自ら命を捨てることになる。

また、「人生の決定的な局面で介入してくる、自分そっくりの他者」というモチーフには、エドガー・アラン・ポーの “William Wilson” からの影響をたどることも可能であろう。

研究発表 3 Short Paper Session 3

『ドクター・マリーゴールドの処方箋』—ディケンズにおける感情と倫理

“Doctor Marigold’s Prescriptions”—Dickens, Affect and Ethics

溝口 薫

1865 年、*All the Year Round* のクリスマス特別号に掲載された “Doctor Marigold’s Prescriptions” は、聾啞の子供を養女として引き取り育てた Cheap Jack が一人称で語る彼の人生の物語である。このユーモアとペーソスに溢れた後期の短編小説は、当時 Dickens 自身による公開朗読の人気演目にもなったが、作品に対する正当な評価は、しかしながら、つい最近まで待たねばならなかった。その理由は、この作品がセンチメンタルであると見なされてきたことにもよるが、さらに、障がいのある登場人物の先駆的な扱い方にもあったと思われる。この佳作作品は、1842 年、作家がアメリカ旅行中、

Dr. Samuel Gridley Howe と盲聾啞の生徒と出会ったことをきっかけとして生まれていく。本発表では、この作品をめぐる背景事情、ならびに語りの特徴に注目し、この物語における感情と倫理の関係を探る。

第2部 シンポジウム Symposium

「今に生きるディケンズ」 “Dickens’s Presence Today”

今年、2020年はディケンズ没後150年にあたります。それを記念する意味で、ディケンズの現代における意味を考えるシンポジウムを開催したい、という執行部のお達しを受けました。それならば、と、この際思い切ってフェロウシップの外からゲストをお二方お迎えして、阿部先生にはディケンズと現代日本文学、板倉先生にはディケンズと現代イギリス文学との関りを中心にお話しいただく予定で、できるだけ多様な角度からこの問題にアタックしてみようと思います。発表は年齢順で参ります。

「『僕は生まれる』という不思議と普遍性」

“The Wonder and the Universality of ‘I AM BORN’”

猪熊恵子

本発表では、現代の文学作品におけるディケンズの再表象のありようを探ることはしない。むしろ、極めて無責任な形でディケンズ作品に頼りつつ、「生きる／生まれる」というテーマを、小説が描き出すことの困難について考えてみたい。「生誕」の対蹠的位置づけにある「死」が、古今の小説、または物語一般において、ときに語りの契機、ときに幕引き、またはそのほかあらゆる機能を果たしうるものとして、常に中心的／駆動的表象であり続けるのに対して、「生誕」そのものを取り上げるとき、小説はなぜか（とりわけリアリズム）「小説らしくなくなる」ようである。本発表ではこの不思議を出発点として、『トリストラム・シャンディ』のような素敵な「反小説」や『フランケンシュタイン』のような怖すぎる「似非小説」、そして20世紀のイギリス小説、現代日本の小説群をパラパラと取り上げつつ、「僕は生まれる」という表象の普遍性について考えてみたい。

「『本当にタイムトラベルしたい?』—ディケンズと現代イギリス作家たち」

“Would you actually *like* to time-travel?: Dickens and Contemporary British Novelists”

板倉巖一郎

21世紀のいまも、ディケンズの人気は健在のようだ。サラ・ウォータース (Sarah Waters) の『荊の城』 (*Fingersmith*, 2002) やスザンナ・クラーク (Susanna Clarke) の『ジョナサン・ストレンジとノレル氏』 (*Jonathan Strange & Mr Norrell*, 2004) は彼の作品を彷彿とさせる人物やサブプロットを盛り込んでいる。かつてラシュディ (Salman Rushdie) が『我らが共通の友』 (*Our Mutual Friend*, 1864-65) のミュージカル版『フレンド!』 (!) を登場させたように、現代を舞台にした作品にディケンズ作品を組み入れることだってある。「偉大なるブレイグジット小説」と評されたアリ・スミス (Ali Smith) の『秋』 (*Autumn*, 2016) では、主人公の美学講師が『二都物語』 (*A Tale of Two Cities*, 1859) を読んで強い感銘を受ける。ウォータースとスミスは特に興味深い。博士号保持者でもある彼女らはそれぞれどのようにしてディケンズを生かしているのか、探してみたい。

「ディケンズと事務能力」

“Dickens and Paperwork”

阿部公彦

ディケンズは明治以来さまざまな日本の作家に影響を与えてきた。とりわけ大江健三郎については『キルプの軍団』でのあからさまなオマージュもあり、正面から影響関係が論じられることがある。たしかに粗削りな文体、人物造形の大胆さなど、両者には類縁性が見られる。

今回の発表では、筆者は固有名の問題に注目してみたい。二人の作家にみられる、ことさら恣意的な名前の使用には、ある特徴的な言葉との付き合い方がにじみ出しているのではないか。

ディケンズは『荒涼館』で、果てしなく続く裁判の事務作業の虚無を描き出してみせた。そういう意味では、この作品は「代書人バートルビ」となるが、世界最初の〈事務能力小説〉の一つだと言えよう。そこでは公的な制度による、プライベートな言葉や固

有名の「乗っ取り」が問題となっていた。本シンポジウムでは、かねてからディケンズにおける言葉の所有権にこだわってきた研究者の方とも一緒にできるとのことなので、是非熱く語り合いたい。

「ディケンズと現代の TV ドラマ」

“Dickens and the TV Drama Today”

佐々木徹

ちょっと昔は、ディケンズが今生きていたら映画の脚本を書いていただろう、とよく言われたものである。現在は、ディケンズが今生きていたらテレビドラマの脚本を書いていただろう、という旨の発言をしばしば耳にする。確かに、現代のアメリカはテレビドラマの黄金時代を迎えたと言われるほど優れた作品がたくさん出ており、その中でも際立って評価の高い *The Wire* についてはよくディケンズが引き合いに出される。本発表では、このような状況の意味するところを考えてみたい。